メンバーに聞く

# 京都力の源泉はクロスオーバー

山田　啓二　京都府知事

やまだ　けいじ
1954年4月生まれ、兵庫県出身。
京都府総務部長、副知事を経て平成14年4月から現職。趣味は歴史散策、旅行、スポーツ観戦など。
座右の銘は「一期一会」。

## ＜未来を見つめて今を語る＞

この変化の激しい時代に「30年先の京都の未来を考える」と言えば夢物語のようなもので、そんなことを考えている時間はないと思われるかもしれません。しかし、日々のことに追われて余裕のない現代だからこそ、「将来、京都はどういう存在でありたいのか」ということを見据えた上で、今を考えるということが重要なのではないでしょうか。

特に、人類が経験したことのない高齢化社会の問題や、東日本大震災が突きつけたエネルギー問題などは、長期的視点に立って「あるべき姿、進むべき方向」というものをしっかりと見据え、その上で現在の社会にフィードバックし、「では、今何をすべきか、いかなる行動をとるべきか」という風に、バックキャスティングの手法で対応していくことが大切だと思います。

こうした観点に立って、「京都の未来を考える懇話会」では、その「ありたい姿」を求めて、各界のリーダーが額を突き合わせ、30年後の京都の未来像について真剣に議論しました。「世界交流首都・京都」という、まさに世界の中での京都の存在意義を中心としたコンセプトをつくりました。

何をつくるとか、ここに大規模投資をするということではなく、「交流」というシンプルなコンセプトにたどりついたのです。

## ＜もう一つの首都は京都＞

「日本に京都があってよかった」というキャッチフレーズがありますが、過去形なのでしょうか。東京という高度に近代化されたグローバル都市に、日本中の富や権力が集中し、経済優先的な価値観のもと、日本の国をここまで牽引してきたことは間違いありません。しかし、それだけでいいのでしょうか。日本人のこころや生き方、日本の大切な伝統や文化、これからの科学の進歩のあり方などを考える時、東京とは異なる価値観を体現したもう一つの場所が、今ほど求められている時代はないのではないでしょうか。

京都は、千年以上にわたり都が置かれた日本の歴史文化の中心地であり、人口当たり全国一の大学数を誇る学問の都でもあります。世界を見渡すと、都として栄えた都市は都でなくなるとやがて衰退していくというのが一般的ですが、京都は、今なお国内外から大勢の人々が訪れる国際的な交流都市であり続けており、単なる遺跡の番人ではありません。

人々が認識している現在の首都は東京かもしれませんが、日本人の心の首都になれるのは、間違いなく京都だと思います。京都が日本のこころと文化を体現するもう一つの首都になっていくことが、この国がバランスのとれた健全な発展を遂げていくことにつながると確信しています。

そして、私共がめざす「世界交流首都」は、富と権力の都ではなく、人々が集い、交流する都です。世界中から留学生や科学者、技術者、文化をこよなく愛する人々が訪れ、交流し、その中から、人々を豊かにし、幸福にする「新しい価値」を生み出す「交流首都」を京都は、めざしたいと思います。

## ＜双京構想と留学生５万人構想＞

まさに30年後のためのビジョンを実現するために、京都の未来を考える懇話会では、いくつかの具体的な提案をしていますが、中でも特徴的なものは「双京構想」と「留学生５万人構想」です。

「双京構想」は、東京一極集中の危うさの中で、日本の大切な皇室の安心・安全と弥栄のために、皇族の方に東京だけでなく、京都にもお住まいいただきたいという願いから生まれました。皇室は、日本人の精神的支柱であるだけでなく、日本文化の中心となる存在でもあります。そして、この構想を実現できる地は、京都しかありません。さらに文化庁、観光庁の京都移転も実現し、グローバル都市・東京に対し、名実ともに京都が日本文化の継承と発展を支えていきたいと考えています。

他方、「留学生５万人構想」は、京都の成長戦略にとって不可欠な人材育成という点で極めて重要です。少子化が進む中で海外の優秀な若者、特にアジアの留学生が京都に集い、交流し、刺激し合うことによって、大きな活力が生まれることは間違いありません。同時に多くの留学生の人たちが伝道師となって、日本の文化を広く世界に発信してくれることでしょう。

## ＜「世界交流首都・京都」をめざして＞

明治維新の大変革の際、先人たちは未来の京都に大きな希望を持って、琵琶湖疏水を築き、京都大学（第三高等学校）を誘致しました。当時、「もっと身近なものに税金を使え」といった反対論もあり、大変な議論になりました。しかし、その場しのぎではなく、次の時代を見据えた決断こそが、今の京都を創り上げているのです。今日ある京都が当時の人々の英断の上で成り立っているとすれば、今を生きる私たちも、30年先を見通したビジョンを描くことこそ、未来の人々に対する責務ではないでしょうか。

今ほどモノの豊かさに恵まれた時代はありません。それなのに、閉塞感に覆われ、人々が夢を持てないのはなぜでしょうか。30年先を希望を持って語れるようにしなければなりません。

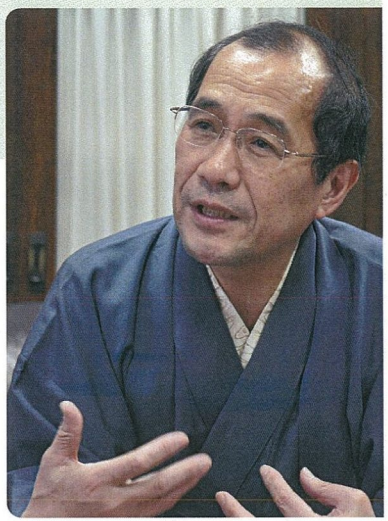
この世にあるもので、誰か一人だけで創り出したものなどひとつもないと思います。「交流」こそが人を育て、新しい文化、技術、経済を生み出し、より良き暮らしと社会を創造する源泉です。

「世界交流首都」は、京都ならではの、京都にこそふさわしい壮大なコンセプトだと思います。オール京都でこころを一つにして、進んでいきたいと考えています。

メンバーに聞く

# 融合の力で未来を拓け

## 門川　大作　京都市長



かどかわ　だいさく
1950年11月生まれ、京都市出身。
モットーは「現地現場主義」。
好きな言葉は「心を込めてすべてを大切に」。
趣味は「人間浴」「仕事を楽しむ」。

### ＜学び、働き、命輝く暮らしを＞

京都の経済界、大学、文化芸術、メディアのリーダーと行政が肩肘張らず率直に話し合える場が「京都の未来を考える懇話会」でした。緩やかな関係ですが、親密な「オール京都」の態勢を今後も発展させていきたいと思います。

30年先の未来像を「世界交流首都・京都」と定めましたが、理念は京都市が昭和53年に策定した「世界文化自由都市」と通底しています。人種、宗教、国家体制等を超えて世界の人々が集う命輝く都市、そして世界の文化首都です。

京都に生まれ、あるいは京都を訪ねた人々が、京都で学び、働き、命の輝く暮らしを実現できる、人々の幸せと世界の平和に貢献できるまちづくりを目指すことを再確認しました。

私たちはこれまで物質的な豊かさを追い求めてきましたが、これから求められるのは精神的な豊かさです。文化や芸術、生き方の哲学、宗教が大切な時代を迎えようとしており、京都がそのモデル都市として大きな役割を果たすべきでしょう。

高齢化社会、介護や医療、年金、そして子育てなど直面する課題はたくさんあります。しかも、それらは互いにリンクしています。例えば、心の病や自殺、いじめ、DVなどを克服し、生き生きとした社会を作るには医学だけでなく、芸術や文化、地域社会の在り方、宗教などがしっかり融合して対応していくことが大切で、そうした課題解決へ京都ならではの取り組みが可能です。京都は伝統産業から先端産業までのモノづくり都市、そして質の高いサービス業、おもてなしの心、観光、大学、文化、芸術などが融合してきた都市です。その歴史力、文化力、地域力、何より人間力を生かした未来像を描き、オール京都で実践せねばなりません。

### ＜「双京構想」で日本文化の中心地に＞

東日本大震災は、さまざまな教訓を与えました。東京一極集中の問題やエネルギー政策、ライフスタイルや産業のあり方、地域コミュニティの希薄化などの課題が明らかになりました。これらの課題解決には、京都ならではの強みを生かすことが大切です。新機軸を打ち出すことも必要ですが、京都が今まで大切にしてきたことや、強みに自信を持ち、それを加速させるような取り組みも重視せねばなりません。

例えば、エネルギーや環境に配慮した「スマートシティ」「エコシティ」を進めなければなりませんし、何よりも、京都ならではの地域力を生かし、コミュニティの活性化が重要です。公共交通優先の「歩くまち京都」の推進なども加速させたい。

今回の「双京構想」の実現や文化庁、観光庁の京都への移転は途方もないように思われるかもしれませんが、「古典の日」法制化の実績もあります。日本文化の中心となる存在として皇族の方に京都にお住まいいただく。京都が最もふさわしいまちです。

政治の中心は、鎌倉時代から関東へ移ったが、それでも京都が都であり続けました。それは皇室があり、芸術、文化、モノづくり、学問、宗教の中心地だったからです。それらを大切に「生活の中に日本文化を感じるまち」を目標に掲げたい。

「文化だけで飯が食えない」とおっしゃる方もおられます。しかし宮廷文化や社寺仏閣、文化を愛する町衆の生活があって精緻な匠の技や伝統産業が発展しました。そうした精密技術と大学との連携の中で世界に誇るベンチャーも輩出しました。文化が地域経済を活性化させます。

京都産業の強みと高い都市格を生かして、研究開発型の企業を創出、誘致し、世界の富裕層の誘客を念頭においた世界ナンバーワンの観光都市、国際会議都市を目指すべきです。

### ＜30年先のリーダーを育成＞

将来のビジョンに向けて最も力を注がなければならないのは「人づくり先進都市」です。その第一歩が、徹底した子育て環境の充実。行政、産業界、大学、教育、福祉、地域、NPOなどが連携して、子どもが生まれてから就職するまでを地域で支える仕組みを作りたい。「京都で子育てすれば安心」といわれる環境ができれば、命の輝く都市につながります。そこに住む人が幸福感を感じないのに、どうして観光客が訪れてくれるでしょうか。

30年先の産業を見通すのはなかなか難しいでしょう。30年前に、今日の産業界を想像した人が少なかったように。だから、まず30年先の産業の担い手、リーダーとなるべき人材を育てることこそ大切であります。人づくりが一番大切。そのことに知恵を重ねたい。

京都の最大の強みは「融合」だと思っています。産業、観光、大学、教育、福祉、文化、宗教などが連携、融合して千年を超える都を維持してきました。各分野は、それぞれこだわりがあります。時には軋轢もあるでしょうが、さらに連携のため一歩踏み込みたい。

連携とは自己変革！相手に求めるだけでなく、自己変革しながら手を結べる洗練された関係づくりです。行政も、さらなる自己変革を行い、互いに信頼を深めたいです。私たちは30年先のビジョンを描きました。多くの方々の批判もいただきながらビジョンを深化させ、オール京都で一歩一歩確実に実現させたいと決意しております。

メンバーに聞く

# 「知恵の生態系」から革新を

立石　義雄　京都商工会議所会頭
京都府商工会議所連合会会長

たていし　よしお
1939年11月生まれ、大阪府出身。
オムロン株式会社名誉会長。
「知恵産業のまち・京都」を提唱し、京都産業の発展に取り組む。モットーは「人の喜びを我が喜びとする」。

## ＜先人に学び現状から飛躍＞

「京都の未来を考える懇話会」が設立されて3年になります。行政、経済、大学、観光、文化芸術、メディアのリーダーたちが、まじめに議論して30年先の京都のありたい姿を「世界交流首都・京都」と定めました。これから未来に向け生きる人が元気の出る、大きな目標を掲げられたと思います。同時に、議論を通じて「オール京都」という気運を醸成できたことも良かったと思います。

今後の日本経済は低成長時代を迎えるといわれています。京都もその例外ではなく、近未来の京都府の成長率は全国平均を下回りそうです。東京が首都となり、京都に元気がなくなった明治時代、先人たちは琵琶湖疏水を築き、殖産工業を起こして構造転換を図りました。私たちも、先人に学び現状から大きく飛躍するビジョンを描き、新しい経済や産業のあり方を提案することが必要と考えました。

## ＜「忘れもの」を取り戻す＞

これまで私たちは物質的な豊かさを求める工業社会をひた走ってきました。そこでは生産性とか効率性を追求する価値観が重視され、大量生産、大量消費の経済、産業構造が支配的でした。半面、環境とか資源、エネルギー、安心・安全といった分野は未解決のままです。私は、そうした分野を「工業社会の忘れもの」と言っているのですが、これからは「忘れもの」を取り戻すことが大きな社会のニーズになってくると考えています。その際の価値観はヒューマニズム（人間性）の追求です。工業社会の価値観だった生産性、効率性と生の歓喜の価値観がバランスよく、最適に調和した産業構造へ変わっていくと見通しています。

こうした社会の変化を前提に、京都産業の未来を考えました。京都産業の強みは、都市のブランド力や高付加価値経営を可能にする企業の独創性・先端性、地域住民の地域への愛着度の高さ、業種の多様性などがあげられます。

つまり資源の少ない土地でありながら国内外から多くの人を集める都市のブランド力があり、業種の多様性とその融合が知恵の源泉、付加価値の源泉となっている点です。京都商工会議所は、こうした強みを背景に、小さくとも知恵を発揮し、循環型社会やグローバルに対応したさまざまな産業群が集積する、内需成長のモデル都市を「知恵産業のまち・京都」と位置づけました。このイメージをベースに30年先の未来を考えました。

今後成長が見込まれるのは、地域密着度が高い京都が生み出す生活文化に根づいた「新たな内需型産業」、多様な産業集積、知の交流の中で生まれる「イノベーション型産業」、文化的価値や精緻な技術などを生かし、感動を作る「匠の技産業」、ほんまもんと出会い、確かな交流を提供する「ミーティング産業」などです。これらの産業を中心に、互いにつながり、関係性を持ち、知恵や強みをかけ合わせることで新たな価値を創出できます。

自然界の生態系にならい「しなやかな知恵の生態系」が30年先の京都産業の新たな姿でありたいと考えました。京都の歴史からみても、内需型の経済が重要です。今後は、新たな内需型産業をどう創造していくかが課題です。その中からグローバル化していく企業もあるでしょう。言い換えれば、「内需を掘り起こし、外需を取り込む」企業を育てることです。環境、安心・安全、資源・エネルギー、健康、教育、観光、農業など工業社会の忘れものを取り戻す内需型の産業は、これからどんどん生まれます。

「高い文化と学術を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こす」というのが私の持論です。京都には、その潜在力があります。そして、これから革新を起こす時代を迎えます。

## ＜刺激し合って活力を＞

京都はかつて「ベンチャーの都」といわれましたが、大量生産・大量消費の構造の中でのベンチャーではなく、小さくともキラリと光る中小企業こそこれからのベンチャーです。工業社会から持続可能社会へ変化していく中で「規模のメリット」は徐々に低下しています。企業は売上規模の大きさでなく、付加価値の大きさが評価されます。先進国はすでに、そういう傾向が見られますが、新興国など開発途上国では大量生産型産業がまだまだ続くでしょう。海外に進出する産業や人材もいるでしょうが、国内では内需型産業が中心。資源国ではないので輸出で稼がなければならないという課題は残りますが、生活に密着したビジネスモデルは必要です。

地域の活性化は地域に密着した中小企業を中心にした多種多様な内需型産業を形成し、雇用機会を作り出していくしかありません。京都は全国のモデルになるべきだし、なれる力があります。京都産業の多様性、人材の多様性に加えて、観光、MICE、留学生などの多様な訪問者が多くて刺激になる環境があります。だから「世界交流首都」なのです。

確かに人口減少は避けられないでしょう。しかし京都にはプラスアルファの交流人口があります。国内外を問わず多くの人々が集い、交流し、刺激し合って活力を生み、文化を共有する。そんな「世界交流首都」を目指したいと思います。

メンバーに聞く

# 知識と知恵、そして心を育む

松本　紘　京都大学総長

まつもと　ひろし
1942年11月生まれ、奈良県出身。
モットーは「学問と雖も真実を巡る人間関係である」。
好きな言葉は「自鍛自恃」。
好きなことは遊び心。

## ＜大学のまちを育んだ歴史＞

「大学のまち・京都」というビジョンを京都の未来を考える懇話会のメンバーが強く思っていただいた。それは単に京都に大学が多く、学生数が多いということからだけでなく、そういうもので表せない歴史があることを忘れてはならないと思う。

京都は長らく首都であった。天皇がおられ、政治、経済、とりわけ文化の中心地でした。宮廷文化から始まり、武士社会になっても京都は特別のポジションを占めてきました。中でも大学に対する考え方が重要で、まず大学寮ができた。中国の制度を取り入れたのですが、教育の重要性を指導者が認識していた証です。権威や権力だけではついてこないことを知っていたのです。知識や知恵、人格を鍛えなくてはならないという考え方が定着していた。なにしろ菅原道真が学問の神様になった。それほど学問への強い尊敬が京都に根づいていたのです。

平安時代だけでなく、室町時代には「五山文学」があり、江戸時代には「堀川学校」を開いた伊藤仁斎、「石門心学」の創始者・石田梅岩などを輩出した。朝廷、寺社、町衆まで町ぐるみで学問を育ててきました。

明治時代、京都大学のルーツの第三高等学校（三高）も元々大阪に設置されたが、当時の京都府が大きな予算を使って京都に招聘させた。それほど学問を大切にしていた。いくつかの私学が設置者の理念によって作られ、京都に根ざした仏教からも高等教育機関が生まれることになりました。芸術の分野での大学もある。学問の文化が高いということを京都は常にプライドにしており、そのシンボルとして優秀な近代型大学が京都に多数存在していることが重要です。

## ＜産学連携のルーツは京都＞

一時期、「産学連携は悪である」と言われた。国の税金で運営されている国立大学が特定の企業と組んで、特定の企業の利益追及に貢献するのはおかしいという考え方からです。それは一時のことで、現在、そんなことを言う人はいないでしょう。

実は産学連携のルーツは京都にあります。現在、京都の隆々たる先端企業の多くは大学に関係があります。創業者たちは好んで大学に来て、先生たちと一緒に勉強して新しい産業を拓きました。非常に志が高く、金儲けのためだけに起業したのではありません。彼らは決して東京に本社を移すことはないでしょう。企業利益だけでつながっているのではないからです。

## ＜地域課題解決も大学の役割＞

大学の役割は知識と知恵を創造することにあると思っています。知識は荒っぽく言うと理工系、知恵は社会・文化系。その知識と知恵を世界に向けて発信する。同時にセンター・オブ・コミュニティ（COC）の義務もあると考えています。地域コミュニティとかかわり合い、喫緊の地域課題の解決に努めることです。実は京都府、京都市とかなり密接に連携しながらすでに取り組んでいます。学問は社会に貢献する、イノベートしていくものでなければなりません。

現代文明は明らかに行き詰まっています。それを解決するのが知恵の発揮しどころ。知恵は教えられてではなく、自分から拾いにいくものです。京都は、その面でも恵まれています。社寺も文化も繁華街もある。学生にとってはすべてフレッシュに感じられるでしょう。単に便利なだけではなく、心を開けば京都には大きなリソースがある。少し学生をちやほやするきらいがあるが、生き様を考え、京都を理解して全国、世界に散らばってもらう。

## ＜30年先考えるのがリーダーの責務＞

東日本大震災の後、現地でたくさんの金庫が放置されていました。しかし誰も奪おうとはしません。外国では考えられないことです。それが日本人の助け合い、知恵、大和心だと思いました。京都で学んだ若者たちが世界に出ていき、単に勝てばよいというのなら今の経済戦争と同じ。心が必要です。それが京都にはあります。

30年先のビジョンというと何か夢物語のように思われるかもしれませんが、自分だけでなく、子孫のことを考える。何代か先を考えるのがリーダーの役割だと思います。そして強い決心を持って実行する。大きな変化の時代だからこそ強い信念が必要だと思います。

京都はミディアムサイズのまちで、共通の価値観を持ちやすい。東京の場合は利益や法律で縛るしかないでしょうが、京都はビジョンをしっかりと描き、それに向けて認識を共有化して未来を切り開いていけると思います。

メンバーに聞く

# 付加価値高め新たな魅力創出

柏原　康夫　京都府観光連盟会長
京都市観光協会会長

かしはら　やすお
1939年7月生まれ、兵庫県出身
京都銀行代表取締役会長。
経済と観光の両面から、京都の活性化に取り組む。
座右の銘は「一隅を照らす」。

## ＜観光知名度まだまだ低い＞

京都の観光というのは、世界的にみてどのくらいのポジションにあるのでしょうか。米国の富裕層向けの旅行雑誌の調査によると、最も評価が高かったのがバンコク（タイ）、２番目がフィレンツェ（イタリア）、３番目がイスタンブール（トルコ）で、京都は９番目でした。

バンコクというのは、交通の要衝だけあって人々の交流が盛んな都市ですが、王宮や寺院など歴史的建造物が数多くあり、また生活用品から王室御用達まで多彩な手工芸品が有名で、ウイークエンドマーケットやナイトバザールなどもたくさんの人で活気に溢れているなど、独特のブランドを持っているんです。京都はもうちょっと良いものがあると思うのですが、自分たちだけが良いと思っていて、意外と世界的にはまだまだ知られていないのですね。

世界で通用する観光資源をみた時、例えば美術館の数ですが、フィレンツェ、ロンドン、ニューヨーク、ローマ、パリなどには有名な美術館が多数存在する。日本の場合、東京にちょっとあるが、京都はどうでしょうか。世界の人々が京都の美術館に行きたいという欲求がわくでしょうか。

しかし、日本人からみると、京都の文化遺産は評価が高い。京都のことを知れば知るほど、行きたいところがいくつもある。社寺仏閣、伝統文化、美しい風物詩、「食」などは数限りなくあります。でも世界の人からみると存在感が薄いということでしょうか。

## ＜景観守りインフラ整備を＞

情報発信力の弱さもありますが、インフラの未整備もあります。世界の観光都市は地下鉄やLRT、モノレールにトロリーバスなどが張り巡らされ、国際空港からも１時間以内と近い。京都は、地下鉄はありますが、それ以外の公共交通は大量輸送やエコという点で難点があり、関空からも１時間半と不便です。

いま話題のリニア新幹線についても、関西全体の経済効果を考えれば、京都を通った方が良いと思いますし、東京ー大阪間の全線開通をできる限り早期に実現するべきではないでしょうか。同時に、京都から関空までのアクセス改善、舞鶴港を整備し日本海航路を拡張して韓国方面からの観光客の受け入れ態勢を整備することも必要でしょう。

今回、京都の未来を考える懇話会で打ち出した「世界交流首都・京都」という旗印は、京都の都市格を上げ、世界の人々が訪れたいまち、住みたいまちを目指すものです。具体的に言えば、京都の守るべき町並みと、もっと開発してにぎわいを創造するゾーンに分ける。緑を増やして景観保全を図りながら交通網、公共交通を整備していく。

「交流都市」と「大学のまち」は表裏の関係で都市格を上げるうえで重要な要素です。山中伸弥京都大学教授のノーベル賞受賞という画期的な出来事がありましたが、世界中の人が認めるようなレベルの高い学問があり、留学生５万人を受け入れる態勢を整備していく。それから「京都賞」についても、これまでの受賞者の中からノーベル賞をもらう人が幾人も出ているのですから、もっと学術的な評価を上げて世界的な賞に育てられればよいと思います。

## ＜未整備の文化遺産も多い＞

文化面でも、整備されず放置されたままのケースがあるのではないでしょうか。明治以降の京都の企業家たちが作り上げてきた事業、歴史的展示物を一堂に集め、その精神などを学びとる「京都事業創造探求館」といったものができないか。

美術館では、いまさらルーブルやメトロポリタンなどと同じものを目指しても意味がないので、例えば日本画の全てが揃っている美術館ができないか。その美術館に行けば、日本画の全てが分かるとすれば、世界中から人々が集まるでしょう。

昔からある文化遺産に頼るだけでなく、新しい魅力あるものも作らなければ、未来の発展は難しいでしょう。平安神宮は明治期に建造された比較的新しいものですが、いまでは観光名所の一つとなっているのが良い例でしょう。

## ＜知恵を活かした産業育成を＞

かつて「ベンチャーの都」と言われた京都ですが、そう容易にベンチャーが次々と出てくる時代ではありません。徒手空拳でいきなり画期的な事業を興すのは難しく、資本とアイデアに富むスタッフが組んで初めて事業の創造につながる時代。だからこそ、大学や学研都市にあるような研究機関が持つ知恵を活かした産業の育成が、京都の強みを発揮できる分野ではないでしょうか。

超高齢社会を迎え、労働力人口が減少するだけに、これからは付加価値つまり質を高める知恵が重要です。知恵の世界では、高齢者の方々が積み重ねてきた経験がものをいいます。知的業務でいえば、すでに習得しているのですから。もちろん自然年齢がありますから一定の限度はあると思いますが、健康で生き甲斐のある生活を送ることができる社会システムを作りたいですね。